

アジアクロスカンントリーラリー2017
 奮戦記オヤジたちの最後の挑戦



4WDプロジェクト代表
 西川 和久氏 インタビュー

文：石井 秋良 / 問い合わせ <http://www.4wdproject.com/>

これまで様々なレースやオフロード走行会を経験してきた西川氏。そして自らも10年間ダート競技会を主催するなど、オフロードシーンにおいて第一線で活躍し続ける滋賀県の4WDプロジェクト。還暦を過ぎた今、人生に悔いが残らぬようと一念発起して、昨年自身初となる「アジアクロスカンントリーラリー」に参戦した。いつかは「海外ラリーを!」と開業当時から夢見ていた西川氏にとっては、四駆人生の集大成とも呼べる最後の挑戦。その奮闘記をレポートする。



あきんど号

1991年、BJ41最終型で海外ラリー（オーストラリアンサファリ/11日間8500km）に初参戦以来、とくにアジアラリーでは回数を重ねランクル70でなんと12回も出場。選手からも「アジアラリーにあきんど号あり!」と覚えられ、長きにわたって挑戦してきた山本則博選手と辻本隆選手。そして昨年、両氏とは開業以来の仲間である西川氏が、チームに加わることとなった。仕様を3名乗車にレイアウト変更し、3人体制初の参戦となったのが昨年開催された「アジアクロスカンントリー2017」だ。

ラリーの過酷さは想像以上
 筋書きのないドラマだから面白い!

昨年8月開催された「アジアクロスカンントリーラリー」に初参戦した4WDプロジェクト代表西川氏。海外ラリー参戦への思いは、同社創業当時傍聴した横田紀一郎氏の講演に始まる。サハラ砂漠をはじめ長年世界中を駆け巡り、パリダカに日本人として初挑戦した横田氏の話に感銘を覚え「いつかはラリーに参戦してみたい」と夢を抱くが、いつの間にか還暦をこえてしまった...

昭和63年に創業し、様々なレースに携わる一方で、あらゆる四駆を手掛けてきた西川氏。この30年間は、ランドクルーザー80や130サーフ、パジェロやサファリといった四駆ブームのまっただ中で活動し、そして昨今ではクロスオーバーSUVの台頭など、四駆業界の良きも悪き時代も経験してきた。

しかしどの時代でも、一貫してブレることなくレースを通じて四駆本来の楽しみ方をユーザー達に提案した西川氏。中でも優勝者にはグアム参戦権を与える「XCダート」レースが記憶に新しい。

「長いようで短い、とにかくあっという間の30年でした」と語る西川氏。四駆が本当に好きな人は、トレンドなど関係なく自然と集まってくるもの。いつしか同社を頼りに集うお客さんたちと、そしてレースやイベントで繋がった仲間達に「若かりし頃の自慢話ばかりではダメだ。今なお現役で四駆を楽しんでいる俺の背中を見てもらい、何か感じてもらえたら...」そんな想いが還暦を過ぎた西川氏の背中を押しした。

そんな折、創業以来の仲間である「あきんど号」の二人と久々のお酒の席で「いつまで現役でいられるか?」とセンチメンタルな話題に。「アジアラリーへの挑戦は、正直70歳を超えたら厳しい。横田氏の講演で感銘を受け、いつかは海外ラリーに参戦する。あのとき抱いた夢に挑むなら、今しかない」と、あきんど号のサービスマカニック兼オブザーバーとして、加わることを決意した。

しかし日本国内で開催されているデイリーレースとは訳が違う。約1週間、たとえ宿舎に戻った時でもラリーのことが頭から離れず、様々なシーンをイメージしながら過さなければならぬ。毎日が万全の整備で挑めたとしても、現地での思わぬアクシデントに見舞われることがあるかもしれない。そこで必要とされるのは、ドライバーとナビ、サービスマカニックの信頼関係だ。

どんなに走破性の高いマシンでも、操るのは生身の人間。ちょっとした不注意や気の迷いで順位が変動したり、完走出来なくなったりもする。だからこそ3人の信頼関係が要求される。お互いの長所や短所を知り尽くした旧くからの仲間であったからこそが、完走へ導いたと言っても過言ではないだろう。

「ラリー中はお互いの役割を尊重し、その日のレースを終えると、それぞれの立場から意見交換ができたのは、30年来の仲間だったから」とキツバリ。「そんな俺たち流のスタイルで7日間臨めたことが何よりも良かった」と語る。

ラリー中印象に残った出来事を問うと「ラリー4日目かな」と西川氏。豪雨で一部洪水の影響もあり、コースは又々タタの轍が続くばかり。ようやくの思いで抜け、一気に速度を上げると、今度は現地のポリスによる検問が行われていたり…。何が起るかわからない、そんなスリルも味わったとか。

さらに、もっとも肝を冷やしたの、最終日前夜にオイル漏れが発覚したこと。パテを借りて、とりあえず漏れを抑えたが、さすがに激しいラリーには耐えられないと判断。3人で話し合い、レグ6のエスケープを決定した。

「これが最後なら無理してでも走らせたろうけどね」。オイルを注ぎ足しながら、アユタヤ遺跡のあるゴール地点へ無事到着。満身創痍の「あきんど号」でゴールゲートをくぐった時は「さすがに感動が込み上げてたよ」と語る。

「もちろん順位は大切だけど、還暦を過ぎた俺たちに大きなトラブルもなく、3人そろってゴール地点に立てたときに思ったよ。お店創業時からの仲間と一緒に参戦出来て良かったよ。そして、俺が若かりし頃に抱いた夢を叶えさせてくれたふたりは、やはり俺にとって生涯最高の友だ！」と。

次なる挑戦は、今年8月12日から18日にカンボジアで開催されるアジアアンラリー2018。「俺の夢を叶えさせてくれたお礼を、今度はあいつらにする番だ！」。



雨季という季節柄もあって、洪水の影響が250kmにも及ぶ過酷な路面状況を走破した最終日の前日。果敢に挑む「あきんど号」にオイル漏れのトラブルが発生。



オープニングセレモニーに象が登場するというタイらしい演出と共に、初日を迎えた「あきんど号」御一行。コーナーやターンが多くて厳しいコースからのスタートとなり、ブッシュをかき分けて、コマ回りのコースを進む難関。この矢印（アロー）を見落としてしまったラリー車が前から来たりと、序盤から道に迷う車両が続出した。「あきんど号」もやはり迷ってしまい、アローの見落としなくクリアできたはずだったが、翌日、PC（チェックポイント）を通過できていないことが判明し、ペナルティーを課せられてしまう。この厳しさもまたラリーの醍醐味。



ステアリング・リンケージとアルミブロックの干渉箇所からオイルが漏れ、パテで応急処置を施す。しかし、ラリーには耐えられないと、最終日はエスケープを選択した。



アジアクロスカントリーラリー期間中は、クルマを降りても、そして寝ても覚めてもラリーのことしか頭に思い浮かばなかったと言う。「ラリーは楽しみなアカン！」と笑顔を確認したとえ腕に落ちない結果やトラブルに見舞われても、最終笑顔を絶やさなかった。



オイル漏れのトラブルから明けた最終日。オイルを注ぎ足しながら見事完走を果たす。順位も大切だが、何よりも大事なのは完走すること。西川氏にとって初参戦となった「アジアアンラリー」は、あきんど号のサービスマニックを全うした。自身がダイレクトにアジアアンラリーを体感したことで、新たに見つかった対策と課題が、今年のラリーでは、存分に反映されるはずだ。まだ半年先のことではあるが、チーム「あきんど」のラリーに対する熱は、すでに高まっているようだ。

異国の地タイアユタヤをスタート一週間の総距離は、約2000km！

アジアアンラリーの経験が豊富なあきんど号のふたりから「チームメイトとしてともに参加しよう」と、声を掛けてもらったことから始まった西川氏の海外ラリー最後の挑戦。昨年春までにミーティングを重ね、8月の出港に向けて、参戦車両FJクルーザーの改善作業を、急ピッチで進めることとなった。

まずは2名乗車から3名乗車に変更するためのロールケージの加工。そして、エアコンの修理やバックカメラの装着、ラリーコンピュータの取り付けなどを進め、運転席・助手席にRECAROシートを新調した。非常脱出装置も装備。さらに、スペアタイヤを収めるためのロールケージ増加工、収納ケースの加工と設置、後部シートの装着など、いずれも、機性能性を考慮しながら無駄を省く取り付けとした。

また西川氏が乗り込む後部座席からも、コドライバーの補助が出来ようiPadを加工し、モニターとして設置。そして氏のを置くスペースは、脚を労わるためのモニターではなく、踏ん張るためのフットレストをセットした。

そしていよいよ戦いの舞台へ。「あきんど号with JAOS」の還暦を過ぎた三人は、それぞれの仕事をまっとうすべく、それぞれ互いの役割を尊重しながら、タイの大地に挑んだ。

西川氏は、前列の2人が集中できるようにラリー走行中は、一切口をはずさず沈黙に徹した。しかし、後部座席へダイレクトに伝わってくる足の動きなどを観察しながら「今後の改善点などを常にシミュレーション